

話しの花が咲く

「ひの郷会・奥渡会」花見会



今年もにぎやかに。懐かしい顔ぶれがそろう

関西地区在住の奥渡地区出身の皆さんによる「奥渡会（松本清会長）」と関西地区在住の日野町出身者の皆さんによる「ひの郷会（森田融彦会長）」の花見会が、4月17日に大阪城公園で開かれました。

奥渡会の（ひの郷会共催）花見会は12年目を迎えました。当日は晴天に恵まれ、気持ち良い春の日射しが降りそそぐ中、25人の参加があり、盛大な花見会になりました。日野町からは、景山町長ら3人が参加し花を添えました。

持ち寄った手作りの昼食弁当の懐かしい味と話に花が咲き、来年の再会を約束しました。

新緑に映えるツツジ

滝山公園つつじまつり



多くの行楽客がツツジとサクラの競演を楽しむ

日野町のツツジとサクラの名所、滝山公園（中萱）で、毎年恒例のつつじまつりが4月16日から5月5日まで開かれ、多くの人出でにぎわいました。

公園内には、約3万本のミツバツツジと、約100本の八重桜があり、毎年、その競演を楽しもうと町内外から多くの行楽客が訪れました。今年は春先の気温が低く、ちょうどゴールデンウィークに見ごろを迎えました。

期間中は売店や露店が開かれ、地元の特産品などを買い求めたり、花々に囲まれて弁当を広げたりと思いに、楽しんでいました。

被災した子どもたちへ

木のおもちゃづくり



参加者は、被災地へ送ろうとおもちゃを作る

毎月第3日曜日に町図書館車で活動している木のおもちゃづくりグループ（金田美紀代表）が、東日本大震災の被災地に手作りの木のおもちゃを贈ろうと計画し、4月17日の活動日に町内外から多くの参加がありました。

代表の金田さんは、「本と一緒に送ったら心が和むのではないかな。たくさん作りたい」と、参加者に声をかけます。また、町外からの参加者は、「被災地に送ることは良いこと。上手に作ることはできないが、和んでもらいたい」とおもちゃづくりに向かっていました。できあがったおもちゃは仮設住宅が完成したら送ることになっています。

今年は10回記念公演

町民ミュージカル稽古始まる



歌唱指導を受ける出演者。力が入った稽古になる

今年、10回目の公演を迎える町民ミュージカルの説明会が5月5日、町文化センターホール森の音楽隊で開かれ、出演者やその保護者ら約50人が参加しました。

説明会では、指導者らが心構えなどを出演者に話し、11月の公演に向けて奮起を促しました。

説明会後は早速、稽古が始まり、出演者はステージの上でピアノを囲み歌唱指導を受けました。

今回は、「きらりこの町く遠いむかしむかし、僕たちの町おこし」と題し、カップやオシドリたちが登場する日野町にちなんだ物語です。大人・子ども合わせて30人の出演者が頑張ります。どうぞお楽しみに。

災害派遣を終えて

日野町健康福祉センター
保健師 生田 季香



宮城県石巻市で活動 避難所、家庭を訪問し、心身のケアに取り組む

この度、4月20日から4月26日まで宮城県石巻市に行ってきました。これは、被災県から国に災害対策基本法に基づく保健師などの派遣依頼があり、鳥取県が派遣調整し、第10班として現地に派遣されたものです。

県の公用車を使い、県の保健師1人、運転手2人、町の保健師1人の4人のチームで、20日に根雨を出発、21日に石巻市に入りました。石巻市は1市6町が合併した人口162,822人の市で、全国有数の水産都市です。その中の旧河北町の総合支所（人口11,946人）で活動しました。

家庭訪問で健康相談

宿泊地から高速道路を使って、2時間かけて河北総合支所に毎日通いました。この地区には避難所が3つあり、約800人が避難しておられます。壊滅的な被害を受けた旧河北町大川地区、旧北上町、旧雄勝町からの避難者がおられ、津波で自宅を失い、家族を失くされた人や、泳いで助かった人など多くの人が痛手を受けておられます。

私たちはまず、避難所を巡回して、健康相談を実施しました。「ほかの支援チーム（医療チーム、心のケアチーム、NPOなど）」と同じことを聴き取らないようにと、前のチームが作成された「マップ」を参考に、特に支援が必要な人、一人一人に声をかけていきました。また、2歳児健診の再開

の見通しが立たないので、前のチームが会えなかった対象者の家庭訪問をしました。

継続的な心のケアを

さらに、河北支所の保健師と相談し、訪問範囲を拡大させて大川地区の家庭訪問も始めました。津波の被害は逃れたものの、全児童の7割が死亡または行方不明の「大川小学校」の校区です（子どもたちを守るために、避難所入口にはマスコミが勝手に入らないように張り紙がしてありました）。家族や子どもを失くされた家族、まだ遺体の見つからない家族があり、大川地区の人「どう声をかけてよいか分からない」と戸惑っておられました。そこでは、在宅で介護をしておられる人の介護用品の手配をし、入手できた物は直接届けたこともありました。まだ固定電話が復旧していないので、生活関連の情報が届いてなく、民生委員さんに情報の周知をお願いしました。また、かかりつけの医療機関は流されてしまったけれど別の医療機関が再開したので、薬

がもらえるようになって安心したと話す高齢者もおられました。

相談窓口が必要

現地は、水道・電気は復旧し、少しずつ落ち着きが取り戻されてきてはいましたが、個人により差が見られました。避難者の中には、「余震でまた津波が来たら怖いので、パジャマでは眠れない」、「いつもの睡眠薬は飲めない」と言われた人もありました。今後も心身の不調を訴える人が出てくることも考えられるので、相談窓口の紹介も行いました。大きな被害を受けた地区ですが、それぞれの地区でお寺に避難するなど、助け合いや支え合いの強い地区だと感じました。

鳥取県西部地震の経験を伝える

鳥取県西部地震の経験を踏まえて、河北支所の保健師と今後の乳幼児健診や予防接種、がん検診など通常の保健活動と災害支援活動を今後どう進めていくかを協議して帰庁しました。



津波で流された新北上大橋のたもとにて。奥の建物は大川小学校で、その奥の集落はまだ浸水したままの状態